

里地通信 2001・10

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

第13回目イオングループ里山保全活動

森の学校 森の生態を見つめ生活文化を体験し 木と森と人との関係を学ぼう

2001年8月25日(土) 26日(日)
秋田県二ツ井町



秋田県二ツ井町は、秋田杉で知られる林業の町でした。町には、日本一背の高い天然秋田杉の森、かつての営林署城下町を象徴する近代化遺産「天神荘」、白神山地につながるブナの森、180度蛇行する米代川、県立自然公園きみまち阪などがあり、とても美しく見所多い町です。

ここで、森にふれ、その楽しみ方を体験しようと県内の子どもエコクラブと父兄など総勢90名近くで「森の学校」を開催しました。現地では、町の産業振興課が中心となり、森林組合や、地元の木工作家の方々が手伝ってくれました。

今回の活動の意図は、製材から加工、建築にいたるまで、外材中心の現在の状況の中で、少しでも、日本の杉林や森に関心を寄せてもらいたいと思い、エコクラブの子どもたちやその都市で働きざかりのお父さんお母さんに、国産材と森、特に杉の素晴らしさを体験してもらいました。

「木のまち」二ツ井

日本の林業は今厳しい状況にあります。町の面積の8割という森林資源を持つ二ツ井町では、さまざまなイベントを行いながら、町の活性化を図ろうとしています。

かつて、米代川流域は「天然秋田杉」の宝庫と言われ、樹齢120年以上のものが切り出されていました。現在は、このような天然杉は数カ所に残っているだけで、60年から80年程度の造林杉が中心に切りだされています。

「天然秋田杉」とは、江戸時代に植林された大径木の杉のことをいいます。当時の佐竹藩では、住民による自由な伐採を制限する「留山制度」を設けて、持続的に材を出せるように計画的な林政を行っていました。しかし、その後、明治時代に国有林に移管されてからは、日中・太平洋戦争戦時下において、特に、軍需用に伐採されました。戦後には、住宅建築ラッシュに伴って徐々に天然杉が伐採されました。当時の二ツ井町の人々は、皆、天然杉になんらか関わる仕事をしていました。「天然杉パブル」ともいえる活況を呈していたともいわれています。しかしその乱伐の結果、昭和45年頃には天然杉は殆ど枯渇し、現在主流となっているのは、戦後の拡大造林期に植林された造林杉(秋田杉)です。

現在伐採されている秋田杉ですが、昭和36年からの安い外材輸入と、オイルショック以降の建築ラッシュの頭打ち、建築需要の低迷などから、木材の価格は暴落し事

業採算がとれないことから、除間伐等の手入れが行き届かなくなりました。このような状況の中でも、二ツ井町の人たちは、今ある森林資源を活かしたまちづくりを模索しています。

林業～建築:きみまちハウス

「きみまちハウス」とは、秋田杉の並材(節のある材)を使った、伝統的な軸組み工法による木の家です。持続的な林業を成立させるためには、除間伐を適正に行ってその材を有効に使うこと、本来の木の性質を活かした、長持ちする工法を利用することなどが重要です。そのため、節がある材や除間伐で出る材も有効に使いながら、金具をなるべく使わず、また木が呼吸できるように無垢の材を表に出した家を建てています。それは、長持ちし、解体・修復可能で土にかえる家でもあります。すでに町営住宅や山小屋をこのきみまちハウスで建設しました。また建材だけでなく、二ツ井の山から取れる鉱物ゼオライトを除湿材として利用し、設計・施工は地元の業者を利用して、林業から建築に関わる産業全てにおいて、地元の資源を利用しているのです。

このような二ツ井町で、木工作や遊びの場として、森そのものを楽しめる要素もいれて、今回のプログラムを開催しました。

天然秋田杉の美林

まず訪れたのは、日本三大美林の一つといわれる天然秋田杉の森、仁鮎水沢スギ植物群落保護林。広さ約18ヘクタールの山に、平均樹齢250年、2812本の天然秋田杉があります。ひんやりと静まり返った、水をうったような空気のなか、太さ1メートル、高さ50メートル級の杉の巨木がまっすぐ天に伸びています。谷沿いにあるこの林の中は、しっとりとして地面もぬれていますが、密植状態の杉植林地と違い、日の光がさして思ったより明るい森でした。ここには、日本一高いとされている高さ58メートルの杉がありますが、この杉に限らず、どれも神社のご神木のように荘厳です。途中、地元の方が、天然秋田杉の枝で作ったという木の笛「コカリナ」を奏でてくれました。高いけれどもやわらかいその音色が、森の中に響き渡りました。

たゆたう米代川と原生林の七座山

移動途中、二ツ井町を180度蛇行しながら流れる米代

川沿いに、七座山(ななくらやま)の山すそを通りました。

鉄道やトラック輸送が山で使えるようになる前は、材木はもっぱら「筏流し」といって筏に組んで川を流すことにより運びました。その水運路になったのがこの米代川です。河畔には、当時の貯木場後、かつての営林署であった伝統的な建築様式を残す「天神荘」があります。また川には、鮎を取る網を投げる人の影がちらほらみえました。このヘアピンカーブに蛇行する米代川にはさまれて、低い山が七つ連なる、七座山があります。この山は米代川に斜面が面しているため、緊急時の木材供出に備えて、藩政時代から伐採が禁じられました。そのため、原生林の状態を今に残しているそうです。今回は時間がなくバスから眺めただけですが、それでもその幽玄な雰囲気は伝わってきます。登山コースもあるそうなので、一度は登りたいものです。また、米代川をはさんで対面するきみまち阪側からの眺めは、それはもう、美しいものでした。

木の枝でできたバツタ、トンボ、飛行機

午後は、きみまち阪公園の広場で、木工作を行いました。材料は、杉の間伐材と公園の樹木の剪定枝葉。役場産業課、地元森林組合、営林署の協力を得て、材や機械、道具を準備し、木工作の指導には、地元の木工作家、工芸家の方も加わってくださいました。公園に着いた子どもたちの目をひ



いたのが、枝や葉っぱ、木の実などで作った、トンボ、バツタ、カブトムシ、ウサギなどなど。なんとも素朴でかわいらしいものができあがっています。これらを参考に、子どもたちも自由にいろんなものを作りました。先生の真似をしてウサギやトンボを作るひと、ウマ、サワガニ、飛行機、汽車、...子どもたちからいろんな発想が生まれます。「を作りたいけどどうしたらいいかなぁ」という時は、地元の、山と木の専門家に聞きにいけます。また、大きなものについては、電動ノコで「こういう形にきって」と頼みにいきます。なかなか大人を困

らせたアイデアもありました。もちろん、お父さんお母さんたちもいっしょに楽しみました。皆、終わりの時間になってもなかなか手が休まらないほど熱中し、できたものを大事そうにもって帰りました。

木と愛称のよい天然素材ゼオライト、木の家「樹音」

ゼオライトは多孔質の構造をもつ鉱物の一種です。二ツ井の山からとれるものは大変良質で、江戸時代から利用が始まったといわれます。これは、木炭のような多孔質の構造をしていて、湿気やよごれを吸着してくれる石です。そのため、におい取り、湿気取り、土壤改良材など多用途に利用されています。そのむかし二ツ井では、これを柱の下にして防腐につかったとのこと。この日昼食を取った、秋田杉で軸組み工法により作った「響きホール」では、床下除湿材として使われていました。ゼオライトは、木材の利用と深いかかわりをもった、天然の素材なのです。樹音は、地元木工作家のアトリエ兼ゲストハウスです。床も壁も階段の手すりも、中の家具も、全部地元の材でできています。階段やいす・テーブルなどに使われている木は、小径木の材や根曲がり材、抜根等をそのまま使った、味わいのある二つとないものばかりでした。



このむかし二ツ井では、これを柱の下にして防腐につかったとのこと。この日昼食を取った、秋田杉で軸組み工法により作った「響きホール」では、床下除湿材として使われていました。ゼオライトは、木材の利用と深いかかわりをもった、天然の素材なのです。樹音は、地元木工作家のアトリエ兼ゲストハウスです。床も壁も階段の手すりも、中の家具も、全部地元の材でできています。階段やいす・テーブルなどに使われている木は、小径木の材や根曲がり材、抜根等をそのまま使った、味わいのある二つとないものばかりでした。

すがすがしいブナの森

翌日は、ブナの森に登りました。二ツ井町は、白神山地の南側の玄関口です。世界遺産地域に隣接する195ヘクタールが、「ふたつ白神郷土の森」として、歩けるように整備されています。

この郷土の森の入り口にいくまで、町の中心部から車で一時間ほどかかります。郷土の森の入り口までは、深い谷を見下ろしながらバスで登りました。

ようやくコースの入り口に着き、歩いて散策しました。ブナの葉は光を通すので、茂っていても森の中はとても明るく、すがすがしい森です。下草も多く茂っています。見上げると、絵はがきのような景色が現実のものとして

みえます。

案内して下さった元営林署勤務の工藤さんによれば、人がはいると山は荒れないのだそうです。日本のような温暖湿潤な気候では、放っておくと灌木やつらが茂って森は暗くなり、光を必要とする植物は育たなくなってしまいます。そしてやぶのようになって、人は森からさらに遠ざかってしまうのです。工藤さんによれば、人が入ることで森の中の林相はだいぶ変わるそうです。

ブナの森は、地面がふかふかしていて、とてもいい感触です。これは、地面に約10センチもの腐葉土が堆積しているため。ほじくって見てみると、下に行くにつれて葉っぱが分解されて葉脈だけになり、次第に形がなくなって土に近くなる様子がありました。分解役の微生物、白い菌がみえました。最近、白神山地内で取れた酵母を「白神酵母」と名づけて、その酵母でパンを焼く活動が盛んです。

途中、杉とブナが混じっているところがありました。ここは戦後の拡大造林の時代にブナを伐採して杉を植林したものの、あまり手入れをせず放置しているうちに、ブナの実生のほうが育ち、優勢になった森です。残った杉も、年数の割には細く、この土地の条件は、やはりブナにあっていようでした。

コースの終点につくと、木づくりの山小屋がありました。これは、二ツ井町が地元の秋田杉の並材で建てたものです。外も中も、天井も壁も床も、木だけでできています。一見普通のログハウスですが、実は木造軸組み工法でつくられており、構造が露出しているので軸組みの様子がわかります。階段もクサビで締めてありました。日本の木の家にこめられている奥深い匠の知恵のようなものが感じられて感動的でした。しかし、このような日本の伝統的な工法で建築できる大工は、減っているということでした。

最後に

二ツ井町では今後さらに、森林資源を軸とした、自然と共生する地域資源循環型のまちづくりを進めようとしています。商工会は、広く住民に参加してもらう「まちづくり塾」を開始し、まずは、木材や自然の産物を持続的・循環的に利用してきた里の暮らしを、地元学の手法で学ぶことから始めようとしています。行政も、昨年策定した地域新エネルギービジョンの中で、木質バイオマスの利用（木質廃棄物を利用した木質ペレットの製造、暖

房・ガス発電への利用、木灰の農地への還元)を計画しています。また二ツ井町は、来年の環境自治体会議の会場にもなっています。

木の成長の速度とそぐわなかった、日本の高度経済成長。そのひずみは、二ツ井町に限らず日本の多くの農山村にしわ寄せされたと思います。しかし、それを嘆いては何も始まりません。今、地元にある資源と、長い歴史の中で培われてきた知恵や人間の暮らしのつつましさを見なおし、それを今後うまくいかしていくために、思いを共にして動きを始めることが必要ではないでしょうか。

モクネット事業協同組合

二ツ井町の林業やまちづくりの状況については、モクネットのホームページを参考しました。とても内容が深いのでぜひご覧ください。

<http://www.mokunet.or.jp/>

モクネットは、「米代川流域の秋田杉を、それを使って家を建てたい人に直接届ける、産地直結のネットワーク」です。秋田杉の並材を、軸組工法の一定の規格を定めて製材し、自然乾燥をしながらストックしておき、材の安定供給を可能にしています。また、軸組み工法の施工のできる大工や工務店とネットワークを組み、川上から川下まで、木の家づくりをコーディネートすることで、秋田杉の並材による建築物の普及を進めています。モクネットの活動は、都市生活者向けの活動からスタートしましたが、ここ数年、米代川流域で地元の木を使う運動へと拡大してきています。町営住宅「きみまちハウス」もこのようなモクネットの理念と重なっています。モクネットは、自然と共生した資源循環型の地域づくりをめざし、持続的な経営ができる林業、秋田杉並材の案的供給システムづくり、「木が見える」家づくり・まちづくり、木質を中心とした自然エネルギーの町づくり、里山構想などの未来への町作り構想を描いています。

第14回目イオングループ里山保全活動

ケビンショートの 里山自然観察会 ケビンさんの里山自然観察会 稲刈りと餅つき 散策道作り 炭焼窯づくり

2001年9月8日(土) 9日(日)
三重県藤原町

三重県藤原町は、高齢者による「農業公園」づくりと、教育委員会による「屋根のない学校」で、注目を集めています。この農業公園は、広さ、56ヘクタールの広大な用地に、町の呼びかけによって、65歳以上の高齢者が、個人やグループ単位で、おのおのつくりたい農業公園の



ビジョンを描きながら、自分の作業場所を定めて、自主的な公園づくりの作業を行っています。この公園の一角には、高齢者の方々が植えた梅林があります。今年とれた梅は、藤原町特産の「梅ジュース」として販売され始めました。女性たちは、さまざまなハーブを種から芽だ

しし、公園の一角にハーブ園づくりを行っています。左官工事に関心を示すグループは、地元のセメント会社で不要となった耐火煉瓦を譲り受け、レンガの散策舗道づくりや耐火煉瓦の広場などを整備しています。この農業公園づくりは、高齢者のボランティアによるものではなく、参画したいと手を上げた高齢者自身が、自ら描いた公園構想をもとに作業を行ない、日当が支払われるという藤原町独自の新しい形の公共事業・生涯雇用の場づくりの一環として推進されています。

「屋根のない学校」とは、立田小学校、西藤原小学校、両校のニックネームとなっている「ホタルの学校」と「カジカの学校」にちなんでつけられた藤原町独自の教育システムで、これまでにさまざまな表彰を受け全国的にもユニークな取り組みです。学校から屋根を取り払い、地域の中の生き物や社会の中で、学んでいこうという意味がこめられています。

この農業公園と「屋根のない学校」のある藤原町古田地区は、とても活力ある地域です。この地域だからこそできる里地里山活動を、今回は実践してみました。この地区は、農業公園と尾根を挟んで隣接する集落で、「ホタルの学校」のある地域です。

このイベントの中心を担ったのは、「散策道作り」は、ヘルメットをかぶりチェーンソーを振り回すグリーンボランティア「森林づくり三重」の精鋭部隊と地元の森林組合の方々。「炭焼窯づくり」は、隣県で現在も炭を焼いている製炭職人の川添さんと地元の作業部隊の方々。「稲刈りと餅つき」は、古田地区農事組合の面々。そして、自然観察会は、里山スポーツマンのケビン・ショートさんです。このイベントに参加したのは、イオングループのジャスコが事務局を担っている5つのこどもエコクラブの小学生たちと、地元の「屋根のない学校」の先生や生徒、地元の老若男女のさまざまなの方々などで、のべ300人の方々の協力で行なわれました。

2日間の作業によって、大人用の大きな黒炭窯と子ども用の体験窯が完成し、山間の尾根伝いには、全長約2メートルの自然観察舗道が完成しました。この2日間の様子は以下の通りです。

ケビンさんの里山自然観察会

虫や動植物を観察することは友達を知ろうとすることと同じ
ケビンさんは、20歳の時に来日し、日本の農村の魅力に取りつかれ、30年以上日本に住んでいます。各地で自

然観察会や生き物の調査研究をしておられますが、特に、田んぼと林の境にすむ生き物の多様さに注目しています。ケビンさんが好きなことは、今でも子どもの頃と同じように、一日中、虫をとったり植物を見たり、会った人と話することだそうです。

ケビンさんは、「新しい友達ができたら、その友達がどんなところで、何を食べて暮しているか、好きなものや怖いものは何か、知りたいでしょ。それと同じように、見つけた動植物について知ろうとすることが『自然観察』なんだね」「虫眼鏡で小さいものを見るのは、それを拡大するのではなくて、自分が10センチの人間になったつもりで観察するんだ」というように、自然観察の心得と楽しさをユーモアを交えて話します。また、自然観察のもう一つの楽しみは、途中で作業をしている農家の人に話を聞くことだとか。古田地区でもさっそく、エゴノキの実についておばあちゃんに聞いたところ、昔は洗濯石鹸代わりに使った、という話をきいたそうです。

観察会では、小学校の付近の田んぼと林の間を歩きました。極普通に見る植物や虫も、ケビンさんにかかるいろいろな面白いお話がきけます。子ども達は、夢中で生き物を探してはケビンさんの興味深い話を聞いて目をまわっていました。

稲刈りと餅つき

50年前の稲刈り



鎌を使っっての手刈りと足踏み脱穀機での脱穀。子ども達は、50年前の稲刈りを初めて体験しました。自分の胸の高さくらいにまでなった稲を、かがんでザクッと刈り取ります。日差しが照っていたので、田んぼの稲刈りと用水路での水遊びとを行ったり来たりしながら楽しんで

いました。足踏み脱穀機は、最初は重いけれど、リズムに乗ってくるとガーンガーンとあじのある音を出して勢いよく回ります。自分の身体を使っての農作業。そのあとは、地元の方々と一緒に杵と臼での餅つきに参加して味わいました。

炭焼き窯づくり

こどもたち、ミニ窯「なかま」作成!

窯は、大きな窯と、小さな窯の二つを作りました。

<大きな窯>

地区の取り組みとして2週間前から作り始めた炭焼き窯。滋賀県の現役炭焼き職人と地元の方を指導者として築きあげました。幅2.3メートル、高さ1.5メートルの、人間が入る大きな黒炭窯です。耐火煉瓦を積みあげ、空気が入らないように周りに土をたたいて塗りこめます。周囲を作り上げた窯に、最初に焼く原木をびっしり敷き詰め、むしろをかぶせてその上に粘土質の赤土を載せてカケヤでたたき、土の中の空気をたたき出して天井を練りあげます。

今回の作業は、この最終段階の天井づくり。固いカシの木で作った重いカケヤを振りおろす作業は大変な重労働です。たたいて崩れないように伝統的な技法である「みかん割り」というやり方で、順序を決めてたたいていきました。窯の上ののってカケヤを振り落とすので、腰にも大変な負担がかかります。人数が集まったので男手を投入して交代で窯たたき。何とか1日目に完成することができました。二日目には、窯に小屋掛けし、さっそく火を入れました。一回目の炭焼きは、炭を焼くためというより、天井を乾燥させるために行う、窯づくりの仕上げ作業です。炭焼きの煙が漂う中、地元の方の間では、早くも今後の活用について話に花が咲きました。まずは、密生しすぎてしまった近くの竹林から竹を切ってきて竹炭を焼くとのこと。山の整備と結びついた今後の展開が大変楽しみです。

<小さな窯>

もう一つ、地元の立田小学校の4年生とその先生が中心となって、幅1メートル高さ1メートルくらいの小さな窯を作りました。小さくても、構造は本格的。グリーンボランティア森林づくり三重の城山さんが指導します。

地面を少し掘り、煉瓦をしき、排煙口もきちんと作って、壁になるレンガをつんでいきます。その周りに、土



をかぶせ水をかけて、子どもたちが踏み込みます。二日目には、原木を子どもたちが切って窯に詰め、土をかぶせて水をかけ、スコップなどでたたき天井を作りました。これに雨よけの瓦を載せて、ほぼ完成。子どもたちは、最初から最後まで自分達で作った窯に大満足で、この窯に、「なかま」という名前を付けました。

散策道づくり

古田地区では、地区内の自然を楽しみながら散策できる道を「古田遊歩道」とし、看板をつけています。この遊歩道の一部として、山のハイキングコースを整備しました。コースは、県境にあたる山の稜線に向かって登り、稜線(尾根道)をしばらく歩いてまた降りてくるコース。途中で烏帽子(えぼし)山を臨むことができます。周囲の山林は、古田地区の方々のもち山ですが、地元の方も20年くらい入っていないそうで、昔の道はけもの道のようになっていました。この道をまた通れるよう、道に張り出した木々や枝を伐り払う作業を行いました。森林組合など地元の「山男」の方々と、グリーンボランティア森林づくり三重の方々の指導のもと、一人一人のこぎりを持ち、伐採しながら歩いていきました。数人参加した子ども達も、のこぎりの使い方を教わって密生しているところの木を伐りだしていました。

コース周辺の山林は、杉やヒノキの植林地と、雑木林が混じっています。雑木林は、シラカシ(クロカシ)、ヒサカキ(地元ではビシャカキ)、アシビ(馬酔木)、ユズリハ、ヒイラギ、タモ、ミズナラ、トチノキ、など、常緑樹・落葉樹の様々な木がありました。馬酔木は粉末にして大根の葉にかけ虫の忌避剤としたことや、ヒサカキは「ビシャカキ」と呼び、半陰半陽の環境でよく育つ

ことなど、地元の方に教
わりました。帰りの下り
の道は、急で、かつ谷沿
いなので滑りやすく、結
構な難所です。その難所
を過ぎるとまた沢が流れ
ています。川といっても
いいくらいの幅と水量が
あるので、ここで汗を流
してさっぱりできます。
その先は、平らな明るい
林の中の道が続き、途中にはカタクリ群生地があったり
して、散策の最後を楽しめそうです。



今後は、難所をもう少し歩きやすくして、この散策道
をどのように活用するかが課題です。

日差しの強い中、どのコースも体力を使う活動でした
が、「えぼし」で地元の方々がついてくれたお餅で力を
補給し、かわいた喉は、藤原町特産の冷たい梅ジュース
で潤しました。

古田地区の拠点「えぼし」

地区の取り組みの中心となり、今回も地元の取りまと
め役をつとめたのは、地区内で設立した有限会社藤原フ
ームです。その拠点施設が、加工販売所「えぼし」。「え
ぼし」では、地区で取れた餅米を和菓子に加工して販売
するほか、野菜の直売、クラフト品の販売等を行ってい

ます。

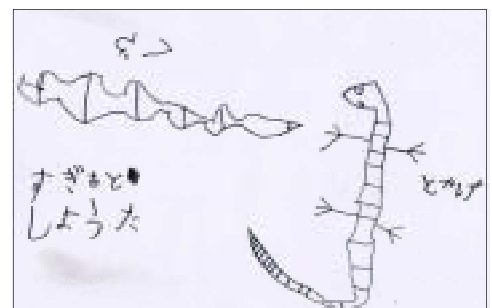
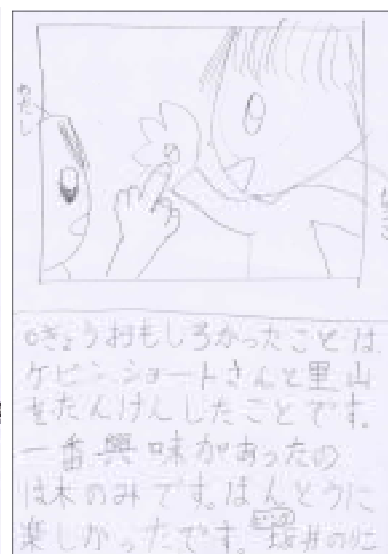
「えぼし」を運営する（有）藤原ファームは、地域の要
望により集落営農を目的として設立された会社です。地
区内75パーセントの水田の管理委託を受け、そこで生産
される餅米を材料に、草餅などの和菓子を「えぼし」で
加工販売しています。農作業や「えぼし」の店員として
地区の人を雇用し、また地区の人たちが作った野菜やク
ラフトを販売し、それぞれの売価の9割を生産者に戻し
ています。

地域の体勢づくりとも位置付けられる今回の活動を機
に、古田地区はさらに前進するのではないかと思います。
経済的にも持続可能なシステムを作り上げている古田地
区のこと、今後の展開が大いに期待できそうです。

最後に

ケビンさんの里山自然観察会、そして、古田地区の取
り組み全般へのしかけづくりを通して、農村にある二次
的な自然の豊かさ・それに由来する日本独自の自然保護
論と、第一次産業としての生産だけではない農村の価値
や魅力をどのように具現化し、地区の人たちの暮らしや
経済にどう結び付けていくか、という課題に対する一つ
のヒントを見ることが出来ました。

地域が元気になる方法は、それぞれの地域によって違
いますが、共通すべき大事なことは、地域にあるモノ・
コト・人を活用すること、関わる一人一人に、楽しさや
やりがいが生まれるシステムを作ることではないかと思
いました。



【寄稿】

里地の水田におけるウミネコによるオタマジャクシの捕食

(財)日本鳥類保護連盟 箕輪多津男



ウミネコ



セグロカモメ

(財)日本鳥類保護連盟の箕輪さんより、レポートを寄せていただきました。水田のウミネコ...その背景には、何らかの環境の変化があるのでしょうか。今後ウミネコに、そして里地での人間の生活に、どんな影響を及ぼすのでしょうか。

ウミネコ *Larus crassirostris* は、わが国では唯一全国の海岸で周年観察することができるカモメの仲間である。その鳴き声がネコに似るところからこの名があるが、北海道を除くと冬鳥であるユリカモメ *Larus ridibundus* が、河川や湖沼あるいは池などかなり内陸にも姿を現わすのと違い、ウミネコは通常海岸や河口、そして海上で生活をしていることが多く、それ以外の地域では見かけることは少ない。

ところが、昨年(平成12年)の5月14日(日)に、所用で山形県飽海郡八幡町にある鳥海山の麓に向かっていった時のことである。一帯に水田が広がる、まさに里地と呼べるところへ差し掛ろうとすると、その水田および畦に数羽のウミネコが降り立っているのが見えた。周囲を見回すと、同様に3箇所ほどに佇んでいるのが確認できた。さて、ウミネコが水田でいったい何をやっているのかと思いきや、水の中をつついて餌を捕っているようなのである。餌とは何か。何やら黒いものが目に入った。

どうやら、それはオタマジャクシのようであった。

ウミネコが淡水域に生息するオタマジャクシを餌にしているという報告を、私自身は聞いたことがなかったので、誠に意外な印象を受けた。と言うよりも、そもそも水田とウミネコの取り合せ自体が、新鮮な(あるいは非日常的な)風景として目に映ったのである。残念ながら、スケジュールの都合でじっくり観察する時間が取れなかったため、詳細な記録は残すことができなかったのだが、ユリカモメを除くカモメの仲間がオタマジャクシを捕食するという事例が他にないかどうか、それ以来大変気に掛かっていた。

そうこうするうちに同年9月15日(金)~17日(日)、北海道大学で開催された日本鳥学会大会において、同大学大学院水産科学研究科の小城春雄教授による「オオセグロカモメ *Larus schistisagus* の水田におけるオタマジャクシ捕食について」という発表を拝聴する機会を得たのである。それによると、北海道後志管内に位置する島牧村の水田地帯においては、1994年(平成6年)からオオセグロカモメによるオタマジャクシの捕食が始まり、以後毎年増加する傾向にある。そして、捕食している個体の中に幼鳥や亜成鳥も含まれていることから、今後も水田におけるオタマジャクシの捕食行動はオオセグロカモメの集団(個体群)に伝播し、益々その数は増え

ていくことであろう、とのことであった。

ウミネコではなかったが、同様に海岸地帯を主な生息域としているオオセグロカモメが、実に7年も前からオタマジャクシを捕食していたという記録に、まずは感心した次第である。すると、セグロカモメ *Larus argentatus* などオタマジャクシを捕食することがあるのではないかと新たな興味も湧いてきた。（いや、既にそうした記録がどこかで記されている可能性もある。）

ただ、ウミネコやオオセグロカモメなどはもともと海鳥として、洋上あるいは海岸に生息する魚介類や甲殻類等を餌としてしているはずであるが、どのようにして、里地の水田に生息しているオタマジャクシを捕食することを覚えるようになったのであろうか。

近年、元々の生息地の自然環境が悪化してきたためか、はたまた新しい環境への適応の結果か、都市部に進出する鳥類が徐々に増えてきている傾向があるが、通常海岸部に生息しているようなカモメの仲間が、山の麓の里地の水田に餌を求めてやって来るというのも、何か同様の変化が背景にあるのであろうか。必ずしも悪く考えたく

はないが、しかしウミネコやオオセグロカモメの上記のような行動を見ると、何らかの自然環境の変化を危惧したくなるというものである。

ただし、彼らを里地の新しい生物の仲間としてとらえることもできる訳で、今後各地におけるその動向に、是非注目していきたいと考えている。

なお、ウミネコやオオセグロカモメが水田に入っていけば、必然的にそこに植わっている苗を踏み荒らすという結果を招くことになる。先程の北海道島牧村の例でも、多額の農業被害が出たため、1999年6月に有害鳥獣駆除として、オオセグロカモメが25羽捕獲されたとのことであった。こうした事態もまた起こり得るということを、最後に付記しておきたいと思う。

【引用文献】

小城春雄・高橋奈々江・関川東明．2000．オオセグロカモメの水田におけるオタマジャクシの捕食について．2000年度日本鳥学会大会講演要旨集．p.46

トキの野生復帰を目指して...これまでの取り組み

佐渡では、昨年8月から、トキの野生復帰をめざしたさまざまな取り組みが行われています。

集落での地元学(両津市野浦地区、両津市月布施地区)、
学校での地元学(百周年事業の一環として、両津市両尾小学校)

水辺の生き物調査(新穂村、両津市前浜地区、河崎地区の小中学校)

ピオトープづくり(新穂村生椿地区、新穂村潟上地区、両津市吾潟地区)などなど。

ここでは、簡単にその概況をお伝えします。

2001年秋には第2回目のシンポジウムを開催し、このような取り組みの事例報告と、野生復帰に向けて佐渡島の参考となるべき全国の先進事例に取り組まれている方々のお話をうかがい、意見交換します。このプロジェクトに関心をお寄せいただき、ぜひご参加ください。佐渡にてお待ちしております。

(詳細は別添させていただきます)

新穂小学校「水辺の生き物しらべ」

水辺の生き物しらべの実施日

第1回実施日 平成13年7月12日(木)

40人で、水辺の生き物しらべ

実施内容について

新潟県トキ保護基金推進委員会と里地ネットワークでは、トキの野生復帰をめざした自然環境調査・地域社会づくりの資料とするために、トキのエサとなる水生昆虫の分布概況調査を子ども達に呼びかけています。佐渡島内の10の市町村の教育委員会を通じて各小中学校に協力依頼を行いました。

新穂村立新穂小学校では、「総合的な学習」の時間で「トキ」をテーマに取り組みを進めています。今年度4年生の授業では、これまでに生椿出身の高野毅氏の案内で生椿を訪ねたり、佐渡トキ保護センター来場者にインタビューをする取り組みを行なっています。「トキ」のエサであった水辺の生き物を見つめるために、「水辺の

生き物しらべ」に取り組んでいます。

現在までにできあがっているモノやコト

「水辺の生き物しらべ」説明用紙に記されたトキのエサとなってきた生き物を発見した小川や田んぼ、さらにはその周辺の環境などについて、地図上に記録し考察しています。

今後の課題

- ・今回の調査は夏でしたが、季節により田んぼの状況も水辺の生き物の状況も異なるので、季節を変えて継続的に行いたい。
- ・水辺の生き物しらべから考察した小川や田んぼ状況について、水、米づくりなどの学習と関連付けて行いたい。



新穂村の水路を、アミをもって調査中。遊びのような真剣な調査に子ども達も満足の様子。

行谷小学校(両津市)「水辺の生き物しらべ」

水辺の生き物しらべの実施日(予定)

第1回 平成13年9月29日(土) 全校児童

第2回 平成13年10月20日(土) 全校児童

第3回 平成13年11月17日(土) 全校児童

今年度月1回の割合で3月まで各地域ごとに実施予定

実施内容について

行谷小学校では、「トキ」をキーワードに各学年、各教科で様々な取り組みを進めています。1、2年生では「いのちを大切に作る」というテーマのもとにニワトリを飼っています。3年生の理科で「昆虫」を、4年生の理科では「川原」、そして社会科では「水道」の学習に取り組んでいます。また、5年生では「自然にやさしい米づくり」の学習に取り組み、6年生では「しあわせ新穂村」というテーマで新穂村のことをまとめ、他県の小学校との交流の取り組みを行なっています。

各学年における共通の取り組みとして「総合的な学習」の時間の中で、月1回、全児童が自分の住んでいる地域の「水辺の生き物しらべ」に取り組んでいます。

現在までにできあがっているモノやコト

各学年の各教科で取り組まれている学習テーマの中で「水辺の生き物しらべ」を位置付けており、その学習成果を「トキ」と関連付ける取り組みをしています。9月からいよいよ水辺の生き物調査を、総合学習の一環として、学区全域で実施します。

今後の課題

・「トキ」をキーワードに様々な展開を地域の取り組みとするために、どのような仕組みを気づいていくか。

今のところの調査では、久知川本流での魚をはじめとする生き物の捕獲・観察が難点です。その一方で、支流やコンクリートで固めた用水路や用水路の弁の水溜りでは、たくさんのアユやヨシノボリなどの魚を捕獲・観察することができました。また、田んぼ内の水溜りでも、たくさんのドジョウを捕獲・観察することができました。地域の人々への聞き取りによると、久知川上流でのダム工事が始まってから生き物の数の減少が激しいとのこと。農薬や化学肥料だけでなく、土木工事なども水生昆虫や魚の棲息に大きな影響を与えるのではないかと推察しています。

今後の課題

- ・今回の調査は秋でしたが、季節により川や田んぼの状況、水辺の生き物の状況も異なるので、季節を変えて継続的に行います。
- ・「地域の川」と地域の生活や環境との関わりの学習をしていく中で、地域の人々、特におじいさんへの声かけを今後行う予定です。



久知川本流で、セルロイドの魚籠をしかけて、どんな魚が入るか調査中。

河崎小学校(両津市)「水辺の生き物しらべ」

水辺の生き物しらべの実施日

第1回実施日 平成13年9月14日（金）
28人で、水辺の生き物しらべ

実施内容について

河崎小学校の4年生は「総合的な学習」の中で「地域の川・久知川」をテーマに、学校の横を流れる久知川の「水辺の生き物しらべ」に取り組んでいます。河口から上流まで四季折々の様子、地域との関わりを見つめる取り組みをしています。

現在までにできあがっているモノやコト

単に水辺の生き物を調べるだけでなく、湧水のある所、現在の森林や田んぼの耕作状況を実地で調べ、地図上で確認および記入して分布概況の把握に努めています。

両尾小学校(両津市)の地元学

地元学調査の実施日

- 第1回 平成13年8月30日 20人で、地元学を実施
 - 第2回 平成13年9月14日 50人で、地元学を実施
 - 第3回 平成13年9月21日 50人で、地元学を実施予定
 - 第4回 平成13年9月28日 50人で、まとめ予定
- 来年迎える百周年の取り組みとして来年度1学期まで継続的に実施予定

実施内容について

両尾小学校では、来年百周年を迎えるにあたり、学校だけではなく地域の営みの百年も合わせてみつめ、そして百年目からの未来を考えたいという要請にもとづいて「地元学」の取り組みを開始しました。地元学と「総合的な学習」と百周年という3つの要素を合わせながら、小学校区である5つの集落それぞれの地域資源調査が、子ども達と先生、そして、PTAの間で始まりました。

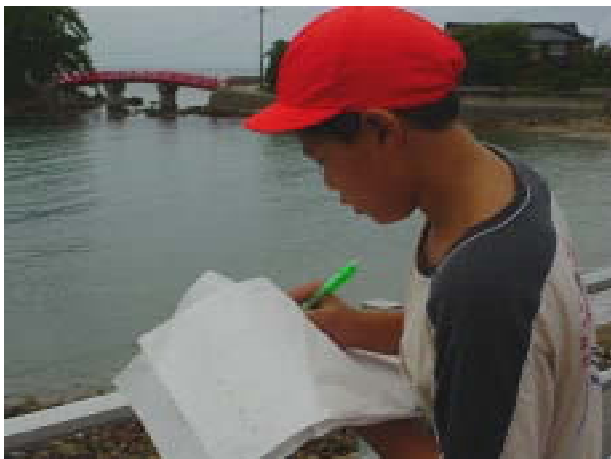
現在までにできあがっているモノやコト

5つの地区の地元学、地域資源調査を通じてPTA、地域のお年寄りなどの協力が得られつつあります。これまで行った調査だけでも、数百枚の写真と聞き取り情報が学校に溜まり始めました。

今後も回を重ねるごとに情報量が増えてゆくことが楽しみです。

今後の課題

- ・学校で蓄積した地域資源を、来年度地域の百年としてまとめていきます。
- ・これらの活動が、PTAから地区の人々へと参加の輪が広がってゆくと、本格的な調査になる可能性があります。広がりが出来るほど、両尾小学校の百年の暮らしと文化の移り変わりが、地域の中で、子ども達と学校を拠点に交流が進んでゆきそうです。



地元学調査用の地図と凡例をもって、調査の実施中。

片野尾地区(両津市)水辺の生き物しらべ

水辺の生き物しらべの実施日

第1回実施日 平成13年8月5日
15名で、水辺の生き物しらべ

実施内容について

片野尾小学校の夏休みの自由研究として出された「水辺の生き物しらべ」について、片野尾育成会では、片野尾の田んぼや小川、池などを見つめ直す機会として、お父さん、お母さんの取り組みが始まっています。

現在までにできあがっているモノやコト

「水辺の生き物しらべ」を行って気付いたことは、子ども達は遊び場として、小川や田んぼに出かけていないことでした。生き物の棲息環境では、コンクリートで固めた水路に比べ、土の水路には生き物がたくさんいること、休耕している田んぼでも、水が張ってあると水生昆虫が多いことに気付きました。また、水辺の生き物しらべをとおしてお父さん、お母さんが、子どもの頃に体験した遊びなどが世代を越えて、共通の話題になることがわかりました。子ども達にとっても、親にとっても自然環境、農業を考える機会となりました。

今後の課題

- ・休耕田に、通年、水をはりピオトープ化のために、地域での仕組みづくりをどのようにしてゆくか。
- ・休耕田のピオトープ化により、学校や地域での教育効果を目指す仕組みをどのようにきずくか。



子ども達が、生き物調べを実施中。

岩首小学校(両津市)「水辺の生き物しらべ」

水辺の生き物しらべの実施日

第1回実施日 平成13年7月21日

25人で、水辺の生き物しらべ

実施内容について

両津市立岩首小学校では、「身の回りの環境に関心を持ち、自然を大切にしよう」という学習を推進しています。自分たちの身近な地域の水田や小川、ため池などに住んでいる生き物を調査することにより、生き物を大切に、環境を保護しようとする意識を育てようとのことから、「水辺の生き物しらべ」に取り組んでいます。

現在までにできあがっているモノやコト

単に水辺の生き物を調べるだけでなく、湧水のある所、現在の森林や田んぼの耕作状況を実地で調べ、地図上で確認および記入して分布概況の把握に努めています。また、お父さん、お爺さんなどの経験してきた話から歴史的に農業とのかかわりの中でも、水辺の生き物について捉えています。

今後の課題

- ・今回の調査は夏でしたが、季節により川や田んぼの状況、水辺の生き物の状況も異なるので、季節を変えて継続的に行いたい。
- ・岩首地区の中には、休耕田や農業用ため池をピオトープとして位置付けようとして既に取り組みを始めた農家もでてきています。このような農家の協力を得て学校教育の中でピオトープを自然環境の観察拠点として活用していく仕組み作りをどう築こうか検討が始まりそうです。



サドサンショウウオやイモリ、ヤマアカガエルを発見。

前浜中学校(両津市)の水辺の生き物しらべ

水辺の生き物しらべの実施日

第1回実施日 平成13年7月29日

8人で、水辺の生き物しらべ

第2回実施日 平成13年8月14日

15人で、水辺の生き物しらべ

実施内容について

両津市立前浜中学校では、全校生徒28名が夏休みの理科の共同研究を行いました。中学校区を水系単位、集落単位で、生徒達がグループに分かれ、「水辺の生き物しらべ」を実施しました。この調査によって、前浜地区の小学校の取り組みとも連動して、水生昆虫の分布概況をまとめています。月布施地区では、7月に集落あげて行なわれた「地元学」の時から、集落の大人と一緒に、手分けしてこの調査を進めています。

現在までにできあがっているモノやコト

単に水辺の生き物を調べるだけでなく、湧水のある所、現在の森林や田んぼの耕作状況を実地で調べ、地図上で確認し、分かったことを記入しながら、分布概況の把握を行っています。また、お父さん、お爺さんなど経験を重ねて、歴史的なできごとや、農業とのかかわりを一緒に学んでいました。

今後の課題

- ・夏だけでなく季節を変えて、水辺の生き物しらべを実施し情報の蓄積を図る必要がある。
- ・子ども達が調べた生き物分布を今後、地域でどのように活かしていくのか。



見つけた生き物をインターネットや図鑑で確認中。

野浦地区(両津市)の地元学

地元学調査の実施日

- 第1回 平成12年10月28日 80人で、地元学を実施
- 第2回 平成13年5月20日 90人で、地元学を実施
- 第3回 平成13年7月21日 30人で、地元学を実施

実施内容について

地域の資源を見つめ直し、地域の活力を高めることを目的として、地域住民とヨソモノが一緒になって、地域の昔と今の姿を見つめ直す「地元学」の手法により地域資源調査に取り組んでいます。子どもからお年寄りまで老若男女を問わず参加することで、昔の暮らしと今の暮らしが対比され、また、ヨソモノの目を借りることで地域の風土や自然、暮らしのありようが際立った違いとして確認されていきます。この地元学調査では四季折々の野浦集落の生活を見つめています。第1回目は、水系ごとに6チームに分かれ、水源地から河口までの調査を行いました。第2回目、3回目では、季節を変えて実施しました。

現在までにできあがっているモノやコト

野浦地区の集水域を網羅した5000分の1の地形図に、歩いて調べたモノやコトの情報を記入しました。撮影した写真は地域資源カードに貼り付けて、その写真のもつ意味を、そのモノを使っている人にその使い方や、使い始めた時期、いつごろまで使っていたか等、モノの歴史や使い方を記録していきました。2回目以降では、山、食、道具、尊ぶこと、海、祭りなどのテーマに分類し調査を深めています。

今後の課題

- ・「地元学」を行なって再発見されたことをどのような方向に展開していくか。
- ・とても素晴らしい野浦の地域資源をどのように公開していくか、どのような外部との交流の仕組みをつくるか。
- ・放棄田、休耕田をピオトープとしてどのような方法で活用していくか。



月布施地区(両津市)地元学

地元学調査の実施日

- 第1回実施日 平成13年7月29日
- 50名で、地元学を実施

実施内容について

知っているようで知らない地域のこと、先人の知恵を受け継いでいないこともあるので、お年寄りから月布施のことを受け継ごう、月布施の情報を共有しようとのことから、「地元学」手法により地域資源調査に取り組んでいます。第1回目では水系ごとに5チームに分かれ、水源地からこの地元学調査では、「水のゆくえ」を探ることから始めました。

現在までにできあがっているモノやコト

月布施地区の集水域を網羅した5000分の1の地形図に、この調査によって歩いて調べたモノやコトの情報を集約しています。撮影した写真は地域資源カードに貼り付けて、写真のもつ意味を、そのモノを使っている人にその使い方や、使い始めた時期、いつごろまで使っていたか等のモノの歴史や使い方を記録していきました。

今後の課題

- ・第1回目の「地元学」だけでは、まだ地域資源をとらえきれていないので、第2回目は、季節を変えて実施する予定です。
- ・ため池の水が低くなり、又、山が乾いていることで地すべり等が起きやすくなっているのではないかと考えている人がいます。
- ・ピオトープ、ため池づくり、田んぼに水を張ることは、砂防的にも重要ではないかという意見があります。



生椿(新穂村)復田作業

棚田復田作業の実施日事前調整内容

- 第1回実施日 平成12年11月19日（日）
50人で旧トキセンター～生椿ハイキングを実施
- 第2回実施日 平成13年5月19日（土）
30人で棚田の復田作業を実施
- 第3回実施日 平成13年7月20日（金）
30人で棚田の復田作業を実施
- 第4回実施日 平成13年8月19日（日）
30人で棚田の復田作業を実施

実施内容について

第1回目は、生椿は、かつてトキの餌場として、地域住民あげでの保護活動が行なわれていました。その中心人物であった故・高野高治さんは生椿から清水平の旧トキ保護センターまで山道を片道1時間半かけて通っていました。トキの棲息した環境が今どうなっているのか、そしてトキを保護してきた人々の生活を学ぶために、新穂村清水平の旧トキ保護センターから生椿まで自然観察とハイキングを行ないました。生椿では、かつてここで暮らしていた高野さんをはじめとする方々から、トキと共に暮らした日々のことをお伺いしました。この生椿で、第2回～4回目に、トキと共生してきた生椿の山と湧水と棚田の関係そして、生き物の復元状況を見つめ直すために、圃場整備される以前のかつての小さい棚田の復田作業に取り組んでいます。この活動は、平成13年5月から、JA佐渡を中心に、新穂村の小学生やボランティアの方々との共同作業により、かつて田んぼだった荒地の復田作業が行われています。

現在までにできあがっているモノやコト

4畝32枚の田んぼは、これまで3回の復田作業によって、13枚の田んぼ（ドジョウ池）に復田され、水を張って、メダカやタニシを放すことができました。現在では、藻や水草が茂り、様々な生き物が集まってきています。

今後の課題

- ・ヨソモノを巻き込んだ棚田の維持管理をどのように進めていくかが検討課題となっています。
- ・小学校の学習田、田んぼのオーナー制、グリーンツー

リズムの体験場にしようなど、様々なアイデアが出されています。

- ・旧高野高治さんの民家跡の復旧と片付けを11月に行なう予定です。この高野家跡（現・高野毅氏の作業小屋ほか）が、交流拠点として活用できないか検討が行なわれています。



1枚1枚ボランティアの手と足で復田された小さな小さな棚田。

潟上地区(新穂村)ビオトープづくり

活動実施日

第1回 平成13年9月15日 15人で、ビオトープづくり
場所：新穂村農業振興公社となりの農地転用田

実施内容について

新穂村農業振興公社の「いちご農園」敷地隣には、放置された農地転用田に周辺の山から水が沁み出して湿地になっています。ここには、ガマ、アシなどの雑草が生い茂っています。この湿地と「いちご農園」を取り巻く水路を少し整備して、小さな池を作りビオトープにする取り組みが始まりました。池に石や木をおいて深みや、生き物の隠れ場所になる場所を作ると、生き物が湧くように戻ってきます。人間が最初に人工物を除去すると、自然は見る見るうちに、回復していき、生き物も棲息するようになるのが不思議です。新穂村農業振興公社の敷地内にある休耕田をビオトープにすることにより、生き物の棲息環境を整え、水辺の生き物の観察拠点として活用を検討中です。この取り組みは、JA佐渡、新穂村農業振興公社とともに検討しながら進めてゆきます。

現在までにできあがっているモノヤコト

雑草に覆われていた休耕田の草刈りを行い、水を蓄えるための深みを作りました。第1回目の活動では、20メートル×40メートルの範囲で、水辺が甦り、トンボが産卵を始めました。

今後の課題

- ・佐渡中に、さまざまなビオトープが生まれると餌場が増えますが、この一つのモデルになるように活動が行われています。
- ・水辺の観察拠点として、教育の現場とどのように関係していくか、今後、検討が必要です。



スコップとクワをもって、深からず浅からず、15センチ～30センチ程の水辺の工事中。どろんこ遊びとしか思えない作業員も何人もいたようだった。



両尾小学校の調査風景

吾潟地区(両津市)山の手入れとビオトープ

事前調整内容

- 第1回 平成13年8月11日(土)
20人で、山の手入れ作業
- 第2回 平成13年9月16日(日) 雨天中止

実施内容について

地元NGO「あがたの切り株」では、里山で遊ぶための活動拠点づくりを行なうことで、新たな里山の価値観を見出して里山保全活動を展開しています。このグループと共にこれまでに散策路を整備し、切り出した丸太を使ったカワイイ丸太の橋を作り、下草刈などを行なっています。周辺には、農業用のため池や休耕田の湿地もあり、水辺の生き物の観察拠点の取り組みも進めつつあります。

現在までにできあがっているモノヤコト

森林保全活動に興味をもっている人や大学の生態学や林学の専攻学生など、集落外の人々の力を借りて、楽しく森林や池、小川、休耕田などの保全を図っています。

今後の課題

- ・下流の新穂村潟上地区では、休耕田をビオトープにする取り組みや、加茂湖で牡蠣養殖をしている漁業者の水の保全運動など、水系でのそれぞれの取り組みとの関係をうまくとることで、大きなビオトープを作ることが可能そうです。



間伐した木を使った丸木橋づくり

イベント・セミナーご案内

フォレスト工房もくり

森林の管理人養成講座

日 時：10月13日(土)9:00-16:00、
14日(日)9:00-15:30

場 所：長野県小県郡真田町近辺

内 容：間伐と造林、林業機械の操作

参加費：3500円/日

ブナの紅葉 写真とハイキング

日 時：10月20日(土)9:30-15:00

場 所：鍋倉山(長野県飯山市)

内 容：静かな秋のブナ林をのんびり散策しながら写真も楽しみましょう。

参加費：5000円

ブナの紅葉 早起き写真撮影

日 時：10月21日(日)4:30-10:00

場 所：鍋倉山(長野県飯山市)

内 容：早朝の光はブナの森をより魅力的に見せてくれます。

参加費：5000円

鍋倉山 紅葉と写真お泊りプラン

日 時：10月20日(土)9:30~21日(日)10:00

場 所：鍋倉山(長野県飯山市)

内 容：2日間楽しみたい方のお得なプラン。

参加費：15000円(一泊二食付き)

木が時を刻む~オリジナル時計作り~

日 時：10月24日(水)13:30-15:30

場 所：ふれあい真田館(長野県真田町)

内 容：木の輪切りを文字盤にして木の実などで時間を表すオリジナル時計を作ります。

参加費：2500円

キノコがり&パーティー

日 時：10月27日(土)9:00~28日(日)11:00

場 所：聖高原の別荘(長野県真績町)

内 容：紅葉の森でキノコを採る!そして一杯(たくさん)やる!たくさん採りたい人は前夜からどうぞ。

参加費：一泊3000円程度

紅葉ハイク~猿倉

日 時：10月4日(土)7日(水)9:30-15:00

場 所：白馬鍾ヶ岳登山道

内 容：紅葉の中、今年最後の無雪期ハイキングを心ゆくまで楽しみましょう

参加費：5000円

森林の管理人育成講座

日 時：11月10日(土)9:00-16:00、

11日(日)9:00-15:30

場 所：長野県小県郡真田町近辺

内 容：林業機械の操作、第1期修了記念お楽しみ講座

参加費：3500円/日

キノコ入門合宿

日 時：11月17日(土)10:00~18日(日)15:00

場 所：越後川口(新潟県北魚沼郡)

内 容：ブナ・ナラ林のキノコ採りと調理実習&宴会

参加費：実費

ボランティアでつなごう森林の回廊

日 時：11月23日(土)-25日(日)

場 所：三日城(長野県真田町)

内 容：各地で森林活動をしている方、腕を磨き会い、語り合ひましょう。

参加費：実費

リース・ジャンボリース

日 時：12月5日(水)13:30-16:30

場 所：ふれあい真田館(真田町)

内 容：12月といえばリースの季節。お好みのサイズにあでやかに飾り付けをしましょう。
参加費：小2500円、大4000円

冬芽の観察～上田市・太郎山

日 時：12月12日(水)9:00-15:00
場 所：太郎山(上田市)
内 容：虫眼鏡の向こうに見えるものは…。樹木の冬芽をじっくりと観察します。
参加費：2500円

森林の管理人育成講座

日 時：12月15日(土)9:00-16:00、
16日(日)9:00-15:30
場 所：長野県小県郡真田町近辺
内 容：第2期スタート
参加費：3500円/日

問い合わせ:NPO法人 フォレスト工房もくり
TEL:0268-72-9733 FAX:0268-72-9732
<http://mokuri.cool.ne.jp>

やまぼうし自然学校

安全登山教室2

日 時：10月27日、28日
場 所：秩父・二子山

天然ヒノキの森 バードカーピング

日 時：11月3日、4日
場 所：木曾・赤沢美林
内 容：去年大好評だった天然ヒノキの森。今年も学術林へ。バードカーピング講習もあります。

森林ボランティア釣る切りとクラフト

日 時：11月10日
場 所：戸隠ふれあいの森
内 容：静寂を取り戻した森。つる切りとクラフトを愉しむ。

冬鳥観察 おやきづくりに挑戦

日 時：12月9日
場 所：真田・入軽井沢
内 容：里山の冬鳥にスポットを当てての観察会

森林ボランティア 薪づくり

日 時：12月2日
場 所：上田東山
内 容：今年最後の森林整備。冬に備えて薪を準備しましょう。

問い合わせ:NPO法人 やまぼうし自然学校
TEL:0268-74-2735
<http://member.nifty.ne.jp/yamaboushi>

エコの森セミナー

第2回森遊び倶楽部「森の芸術家になろう」

日 時：11月11日
場 所：愛知県豊田市 トヨタの森・フォレスタヒルズモデル林

第2回里山インタープリタ-ズキャンプ 「里山学習施設を作ろう」

日 時：11月30日、12月2日
場 所：木愛知県豊田市 トヨタの森・フォレスタヒルズモデル林

第3回コンセプト・プログラム開発会議報告 「森林エネルギー」

日 時：12月中旬
場 所：愛知県豊田市 トヨタの森・フォレスタヒルズモデル林

問い合わせ:エコの森セミナー事務局

TEL:03-3475-7738

<http://www.jeef.or.jp/economori>

農林水産環境展

日 時：11月28日(水)～30日
(農林水産環境シンポジウムと同時開催)
場 所：幕張メッセ展示ホール
テーマ：「自然との共生をめざして」
展示内容：コンポスト関係、エネルギー関係、水処理関係、脱臭関係、土木関係、その他廃棄物処理関係、計測・システム管理、資材・その他、環境保全対応関係、物産販売コーナー
同時開催：農林水産環境シンポジウム
入場料：無料

問い合わせ：農林水産環境展実行委員会事務局
〒160-0004 東京都新宿区四谷3-1-3 第1富澤ビル4階
(株)環境新聞社 事業部
TEL.03-3359-5349 FAX.03-3359-7250
E-mail:efaff@kankyo-news.co.jp
ホームページ：http://www.kankyo-news.co.jp/efaff/

農林水産環境シンポジウム

日 時：11月28日(水)～30日
(農林水産環境展と同時開催)
場 所：ホテルスプリングス幕張
テーマ：「持続可能な農林水産業の発展をめざして」
内 容：「アジア地域の連携による有機資源循環利用の推進」「農畜水林の連携による水環境保全の推進について」「家畜糞尿と食品廃棄物の堆肥生産と利用について」他

問い合わせ：農林水産環境シンポジウム事務局
〒160-0004 東京都新宿区四谷3-1-3 第1富澤ビル
(株)環境新聞社事業部
TEL.03-3359-5349 FAX.03-3359-7250

ニッセイ財団 助成研究ワークショップ

里山の自然を守り育てる

- 里地・里山の再評価とその保全に向けて -

日 時：11月19日(月)10:00-17:00
場 所：JAホール(東京都千代田区大手町1-8-3)
内 容：「里地・里山などの二次的な自然環境とその維持・保全」をテーマにそれぞれ2年間の特別研究助成を受けた研究チームからの成果報告。

研究報告

・広木チーム研究報告

代表研究者総括報告「里山の生態学における諸問題」
名古屋大学大学院人間情報学研究所教授 廣木詔三
「東海丘陵要素の起源と進化」
金沢大学大学院自然科学研究科教授 植田邦彦
「東海地方の植生の特色」
横浜国立大学大学院環境情報研究院教授 菊池多賀夫
「『里山の指標としてのトンボ』」
- 『海上の森』におけるトンボ相の特徴を例として -
名古屋女子大学家政学部教授 八田耕吉

・武内チーム研究報告

代表研究者総括報告
「里山の環境変遷と里地の自然保全戦略」
東京大学大学院農学生命科学研究科教授 武内和彦
「里山ボランティアのあり方」
- 桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの意識と現実 -
明治大学農学部助教授 倉本宣
「生物資源としての里山の利用可能性」
神奈川県自然環境保全センター研究部
専門研究員 中川重年

総合討論の前に(30分)

「今なぜ里山か」
東京大学大学院農学生命科学研究科教授 鷺谷いづみ

総合討論(110分) 報告者全員

コーディネーター/
東京大学大学院農学生命科学研究科教授 鷺谷いづみ
参加費：無料
申し込み締め切り：10月末

問い合わせ：ニッセイ財団ワークショップ事務局
M係
TEL：06-6204-4012